

ウェーバーの科学とフロイトの科学

(Weber's Science and Freud's Science)

坂 恒 夫

(Tsuneo Ban)

1. 序 論

フロイトは、ウェーバーより八年早く生まれ、十九年遅く死んだ。すなわち、ウェーバーの生は、フロイトの生と、まったく重なることになる。ウェーバーとフロイトは、十九世紀末ヨーロッパ社会の同じ空気を呼吸し、社会学と精神医学のそれぞれの専門領野での戦いを通して、「理解社会学」と「精神分析」という新しい方法論を持つ科学を創造したのである。これらの科学は、いかなる関連を持つのだろうか。これらの科学は、いかなる点で等しく、いかなる点で異なるのだろうか。ウェーバーの夫人マリアンネは、自著『マックス・ウェーバー』の表紙の裏に、次のリルケの詩を掲げている¹⁾。「これは、一つの時代がその終焉に当たって、もう一度自分の価値を総括してみようとするとき、いつもあらわれてくる人間だった。そのような時、一人の人間があって、時代のすべての重荷を取り上げ、自分の胸の奥底へ投げこむのだ。……」マリアンネがリルケの詩を介して主張するように、科学者が解くことができる問題は時代が解答を要求する問題のみであり、解くことができる科学者はその問題を自らの問題として自らの生で受け止める科学者のみなのである。すなわち、科学は、世界の中で生を得る人間が、生のために世界を操る人間の行為であり、科学者は、人間の世界の操作が不全に陥ったとき、世界が提示する問題を明らかにし、人間が持つ世界についての知識を利用し、世界と人間の間を操作可能なものに修復する人間なのである。ウェーバーとフロイトは、同じ十九世紀末

ヨーロッパ社会を生き、社会学と精神医学という異質な科学領域で、社会が解決を迫る問題を明らかにし、それぞれに新しい知見をもたらした。すなわち、ウェーバーとフロイトは、科学の対象領域はそれぞれ異なるが、世紀末ヨーロッパ社会が苦悶する問題を明確にし、世紀末ヨーロッパ社会が用意する知識と手段を用いて、問題を解決する処方を示したのであった。ウェーバーとフロイトは、同じ社会が解決を迫る問題に対して、同じ社会が許す知識と手段を用いて、解答を与えたのである。このことは、ウェーバーの科学とフロイトの科学は、対象領域が異なるにもかかわらず、類似点があることを示すのではないか。本稿は、ウェーバーとフロイトが、社会問題・人間問題で苦悶する十九世紀末ヨーロッパ社会を、いかなる科学問題を含んだ社会として捉えたか、社会が解決を迫る問題は、さまざまな領域の科学知識を下に解決が計られるが、いかなる科学知識を下に解決を計ったか、を考えることを通して、ウェーバーとフロイトの科学が、いかなる性格を持っていたか、両者は相互にいかなる関係を持っているか、を考察しようとするものである。

2. ウェーバーの科学

マックス・ウェーバー (Max Weber 1864-1920) は、西欧近代文化の特性である合理主義を解明した思想家、自然科学とは異なる社会科学独自の在り方を説いた社会学者として知られている。ここでウェーバーの科学的主張を、実践理性と純粋理性の異質性の主張である「没価値性」、社会科学の科学方法論の主張である「理念型」、およびウェーバーの科学方法論の具体的実践例であると同時にウェーバーの社会思想の表現である著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中に見ることにしよう。

ウェーバーは、社会学者である。社会科学の目的は何か。社会科学は、歴史的に見ると実践的な科学で、国家の政策に対して、価値判断を与えることを目的としていた、とウェーバーは考える²⁾。国家の経済・社会政策に助言を与

えることが、社会科学の役割だというのである。だが、ここに問題が現れる。認識と価値の混交である。国家の経済・社会状態の把握、政策を実施した場合の予測が認識である。だが、国家の政策として実現を計るためには、政策の重要性・必要性も説かねばならない。これが、価値である。社会科学には、特にドイツの社会科学には、認識と価値の混交が甚だしい、とウェーバーは主張する。認識と価値は、本来まったく異質のものである。認識をいかに重ねても価値は生じないし、ある価値の下での認識は偏った認識になるのである。ウェーバーは、社会科学から価値を追放すること、あるいは認識から価値を明確に区別することを主張する。これが「没価値性」である。ウェーバーは、まず、科学の内容において、認識と価値を分けることを要求する。認識と価値は、いかなる関係にあるのか。科学における認識は、必ず一つの観点から行われる、すなわち一つの価値観の下で行われる、とウェーバーは主張する³⁾。社会事象は、多数の要素の複雑なつながりから成り立っている。この社会事象の即事的な認識は、複雑なつながりが把握されるだけで、意味を持つ認識とはならない。社会事象の意味ある認識は、必ず認識のための一つの観点を取り、その認識に不必要な要素を棄てて、要素間の関連を明確なものにして行われるのである。認識のための一つの観点をとらなければ、人間の行動に役立つ有効な認識は不可能なのである。社会科学で主張される様々な学説は、様々な観点による社会事象の認識なのである。社会学者は、自らの価値観に基づき一つの観点を採用し、その観点から社会事象を整理し、社会事象の因果関係等を把握するのである。これから判る様に、社会科学においては、認識と価値とが不可分の関係にあるから、社会科学で学説を提示するとき、学説の目的である認識から価値を区分すると共に、認識を成り立たせている観点すなわち価値を明確にし、学説に成立基盤として書き加えることをウェーバーは要求するのである。「没価値性」は、また、「教室では価値を説いてはならぬ」という倫理観を、社会学者に要求する⁴⁾。社会科学の目的の一つが国家の政策を補佐することにあつた

ことから、ドイツの大学においては、世界観・理想・実践等の価値が、科学的
事実と共に語られるのが常であったという。また、世紀末ドイツ社会が、マル
クス主義の台頭・ニーチェの文明批判等により、安定性を欠いたことから、価
値を語るという大学の傾向を人々は歓迎したという。ウェーバーは、この傾向
に対して、断固として否の言葉を発する。教室は、客観的事実を語る場であっ
て、個人的心情を語る場ではない、というのである。個人の政治思想は、巷間
の政治の場で語れば良いのであって、受け身に講義を聞く学生に対して、政治
的に扇動する発言はすべきでないというのである。また、授業を受ける学生に
対しても、教師は学問的価値にのみ通じている学者であり、教師に政治的指導
者を期待してはならない、と忠告するのである。

それでは、社会科学の方法論的用語である「理念型」は、ウェーバー科学の
いかなる性格を表すのか。前にも述べたように社会現象のありのままの認識は、
事象を構成する要素の単なるつながりに過ぎないのだった。社会の認識が人間
の行動に役立つには、必要なつながりを保ち不必要なつながりを捨て、認識モ
デルを形成する必要があった。この認識モデルが、理念型なのである⁵⁾。たと
えば、社会科学者の「資本主義」というものの認識を考えてみよう。社会科学
者が、ドイツの経済状態を調べて、そこに資本主義を認識したとする。この認
識は、どのように行われたのか。資本主義と呼ばれるものは、イギリスにも、
アメリカにも、フランスにもある。これらと同じものがドイツにある、と社会
科学者は考えたのである。だが、これらの国の経済状態は、相互に異なってい
る。異なるものから、どのように資本主義を認識したのか。それは、資本主義
の理念型と比較することにより、ドイツの中に資本主義を認識したのである。
事象の認識は、認識主体の内部にある、事象の理念型と比較することにより、
行われるのである。理念型を持たぬ認識は、概念を持たぬ認識が不可能なよう
に、不可能なのである。それでは、理念型は、いかに形成されるのか。理念型
は、社会科学の研究過程で形成されていく。イギリス・アメリカ・フランスの

経済を調査した結果、社会組織・経済組織・生産様式等の点で、共通のものがあつたとする。この共通のものを抽出し、認識モデルとして理念化したものが、資本主義の理念型なのである。したがって、資本主義の理念型は、イギリスの資本主義とも、アメリカの資本主義とも異なっている。それは、経済状態を認識するために人間が作り上げた、経済状態の特性を強調する認識のための理想モデルなのである。この理念型と比較することによって、ドイツの資本主義が、アメリカの資本主義が、フランスの資本主義が、認識できるのである。理念型が、認識のための理想モデルであることから、科学に危険な混同が生じるとウェーバーは主張する。現実とは対応を持たぬ認識のための道具に過ぎぬ理念型が、社会の理想状態・社会のあるべき姿をあらわすとされるのである。例えば、キリスト教を論じるとき使用される理念型「キリスト教」は、世界に分布しているキリスト教を認識するための概念モデルに過ぎないのに、キリスト教の本来の姿を明示する理想像とされ、キリスト教徒の行動の指針とされるのである。これは、認識のための理念型を形成する過程と、行動のための目的を形成する過程が似ているため、両者が明らかに異なる役割を持つにもかかわらず、混同されるからだと言ふウェーバーはいう。この混同は、ドイツ社会の広い範囲に見られ、その一つがマルクスの唯物史観だとウェーバーは主張する。唯物史観は、マルクスが社会を認識するために作った理念型に過ぎないのに、社会変動の絶対法則となって、社会主義者の行動目標と化しているとウェーバーは主張するのである。

ウェーバーは、具体的に社会事象を、どのように捉えたのか。これを、著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に見てみよう⁶⁾。社会事象を科学的に認識するためには、認識対象を明確にせねばならない。すなわち、「資本主義の精神」、「プロテスタンティズム」等を明確にせねばならない。社会事象は、人間と人間の間あるいは人間と事物の間の「意味」のつながりであり、社会学者はこの意味を理解しようとする。「意味」は、相互主観的なも

ので、実証的には捉えることができず、「了解」によって理解できるだけである。社会学者は、構成要素の複雑な意味のつながりに過ぎない社会事象の中から、科学的認識のための認識対象を創造的に形成せねばならないのである。この社会学者が創造した認識対象が理想型であることは、前に述べたことである。社会学者の役割は、認識対象である二つの理想型の間、例えば資本主義精神とプロテスタンティズムの間、の因果的関連を見出すことだと、ウェーバーは考える。理想型は、社会学者が社会を認識するために作り上げたものであるから、その社会学者と同じ思考過程を辿るものによってのみ把握可能であることがわかる。すなわち、社会認識は社会学者によって異なる主観的なものであることがわかる。社会認識が社会学者によって観点が異なる主観的なものであっても、社会科学は普遍妥当なものになるとウェーバーはいう。観点の主観的選択の後で得た科学的結論が、他者との相互主観的な了解によって、立証可能なものであれば、自然科学の法則定立的普遍妥当性とは異なる性格のものであるが、社会科学も普遍妥当性を持つという⁷⁾。資本主義精神の理想型を、ウェーバーは、アメリカ独立宣言を起草したB・フランクリンの処世訓「時は貨幣である……。信用は貨幣である……。……」を挙げて、具体的に定義する⁸⁾。フランクリンのような「自己の職業を使命とする意識」でもって、資本主義精神を定義するのである。次にウェーバーは、この資本主義精神—非合理的ともいえる禁欲的職業意識—が、どこからきたかを問う。この様な職業意識をルッターの聖書独訳に見出したウェーバーは、プロテスタンティズムの倫理思想の分析を始める。カルヴィニズム・ピエティズム・メソジスト派・再洗礼派のプロテスタンティズム諸派の分析から、ウェーバーは、職業実践によって信仰の正しさを証明し、救いの確信を得ようとするカルヴィニズムに、資本主義精神の源を見るのである⁹⁾。最後に、このプロテスタンティズムの信仰が世界に浸透していく過程における信仰の働きを、その時代を生きた人間の信仰の実際を記述して構成的に示すことによって、資本主義精神がキリスト教的禁

欲精神から生まれたことを明らかにするのである。上で示した方法で、ウェーバーは、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神の関連を、因果的に明らかにするのであるが、「理念型」の説明箇所ですべてのように、理念型は、一つの観点からの構成物に過ぎないから、ウェーバーの因果的説明も、一つの観点からの説明に過ぎないことになる。これについてはウェーバーも論じていて、多様な観点からの因果的説明、例えば唯物論的あるいは唯心論的な因果的説明が可能で、科学的認識としては共に正しいとしている¹⁰⁾。また、社会科学の因果論は、決定的で法則的な自然科学の因果論とは違い、部分的で可能的な柔かい因果論であることも、ウェーバー科学を論じるとき、知っておかねばならぬことである¹¹⁾。

3. ウェーバー科学の背景

文化事象である科学は、科学者による構成物であると同時に、科学者を取り巻く社会による構成物でもある。ここで、ウェーバー科学が成立した社会的背景・人間的背景を考えることにしよう¹²⁾。

まず、ウェーバーが生きたドイツ社会について考えることにしよう。ウェーバーが生まれたのは1864年4月で、普仏戦争にプロイセンが勝利してドイツ帝国が誕生したのは1871年である。すなわち、ウェーバーとドイツ帝国は、ほぼ同じ頃に生まれたことになり、これがウェーバーの国家に対する態度を決定したといえる。それまでドイツは、領邦国家と呼ばれ、ドイツ帝国誕生時、約四十の領邦からなっていた。領邦国家の分立は、イギリス・フランスと並ぶ近代国家の建設に桎梏となっていた。領邦国家の一つプロイセンは、ナポレオンとの戦いに敗れて後、抜本的な国家の改革を試み、ドイツで最も工業が進んだ国になっていた。すなわち、プロイセンによるドイツ統一が行われるのである。ウェーバーは、ベルリン育ちでプロイセン人だった。普仏戦争の勝利・プロイセンによるドイツ統一は、少年ウェーバーにとって限りない感激だった。その

後のウェーバーの行動のすべては、祖国ドイツとドイツ文化に置かれることになる。ウェーバー夫人マリアンネは、愛国歌と学生歌は生涯ウェーバーから消えなかったと述べている。国家の統一が遅れて列強の海外進出に後れをとったドイツの最重要課題は、先進資本主義国イギリス・フランスに国際政治と経済面で追いつくことであった。統一ドイツの宰相ビスマルクは、統一によって高揚するナショナリズムに呼応する形で、国家主義的な対外政策・産業政策を推し進める。この国家統一に起因するドイツの対外膨張が、列強の勢力均衡システムの不安定要因になり、第一次世界大戦の原因の一つになったことは周知のことである。これから判るように、ウェーバーの生きたドイツは、ドイツ統一と対外進出によりナショナリズムが高揚し、ドイツ国民の多くが国家のために生きることを是とした時代であった。ウェーバーも、そのような国民の一人といえよう。だが、ドイツは、近代化が遅れたことによる弱点を持っていた。この弱点をウェーバーの主張に沿って考えてみよう。ウェーバーは、国家が国家としての機能を果たすためには、経済力と政治能力が一致せねばならぬ、と考える。政治による権力行使は、経済力の裏付けがあって可能だというのである。ところで統一されたドイツ帝国の政治的基盤は、プロイセンの大農場を経営する地主貴族ユンカーにあった。だが、近代資本主義社会では、ユンカーは没落しつつある階級で、経済力は重化学工業の経営者ブルジョワにあった。また、産業革命の進展により、ユンカーの農業部門から大都市の工業部門への労働者の移動があり、労働者階級という新しい階級が誕生しつつあった。現支配層のユンカーは消え行く運命にあり、ブルジョワの市民階級はドイツ統一を達成した階級ではなく政治的に未熟であり、労働者階級は支配階級が持つべき政治的本能を持っていない、とウェーバーは判断するのである。この様なドイツの後進性は、経済力を握る市民階級への政治教育によってのみ解消できる、とウェーバーは考え、講演会・執筆等の啓蒙政治活動に闘志を燃やすのである。ウェーバーの時代は、また、社会主義の時代であった。マルクス・エンゲルスが綱領

『共産党宣言』を起草したのが1847年で、ロシアの血の日曜日は1905年に発生し、ロシア革命は1917年に起こった。ドイツでは、農業部門から工業部門への労働者の移動が起こり、増大したプロレタリアートの政党である社会民主党が勢いを得ていた。すなわち、ドイツ社会は、ドイツ統一による愛国主義の高揚した雰囲気と、ユンカーが権力を持つという政治的弱点による混乱と、増大する社会主義革命の足音への不安の中にあっただのである。このような社会の中でウェーバーは、社会学者として社会の客観的認識を目標として、価値と客観的認識との混同を気遣いながら、社会学者・社会思想家・大学教師としての生を果敢に生きたのである。

ウェーバーの時代の諸科学は、いかなる状態にあったのだろうか。まず、ウェーバーの研究領野である社会科学から見ていこう。社会科学が、社会事象の科学的認識により国家施策を補佐するため、国家の立場を国民に説いて国家施策を支援するためにあったことは、前にも述べたことである。すなわち、社会科学は国家の端女だったのである。これは、後進国ドイツの科学の特色といえよう。産業革命の進展が生んだ労資の対立・ユンカーの没落等を、ドイツ国家が解決すべき国家的課題と社会学者は考え、国家の介入によって解決しようとしたのである。イギリス・フランスの先進資本主義国では、これらは当事者の力関係によって、あるいは高次の国益に基いて解決していたのだ。後進国ドイツは、全国民が一体となって、英仏と並ぶ先進国家を目指したのである。社会政策協会は、国の施策を社会学者が補佐するために設立された組織である。この社会政策協会が、ウェーバーの活動舞台の一つになっている。愛国者ウェーバーは、この組織の一員となって、国家のために心を砕いたのである。これから分る様に、ウェーバーの時代のドイツ社会科学は、国の施策を助けるためにあったのである。それでは、社会科学に近い学問である歴史学についてはどうか。歴史学も、ドイツ統一以前は、ドイツ統一を絶対的善としていたという。すなわち、ドイツ統一の必要性和不可避性を、英仏先進国の歴史と対比して説

くのが、歴史学の役割であったという。だがドイツ統一後、歴史学は目的を喪失する。歴史学は存在理由をなくすのである。以後、歴史学は、細かな事実・資料の収集にのみ専念することになる。単なる事実・資料の収集は、収集の新しさによって事象が判断されることになり、歴史学は相対主義に陥る。相対主義からは、歴史的課題に対する解決策は生まれてこない。歴史学の相対主義に対して、哲学者ディルタイは、「確信の無政府状態」という言葉を投げつけている。ウェーバーも、歴史学の目的は歴史的個別事象の因果関係を確定するにあるとして、歴史学の相対主義を批判している。ウェーバーの時代は、上で述べた様に、社会主義が勢いを増した時代である。社会主義は、唯物史観に基づく主張である。唯物史観は、階級闘争によって必然的に資本主義は社会主義に変わるとする労働者階級の世界観である。ドイツ社会の資本主義の進展が、労働者階級を増大させ、唯物史観を社会意識としたのである。唯物史観は、社会事象のすべてを階級闘争から説明しようとする世界観であるから、唯物史観に沿った学説は正しく、外れた学説は誤りとなる。すなわち、科学の学説の真偽が、唯物史観という公式によって判断されることになる。これは、事実の学である科学にとって、由々しき事態である。唯物史観を奉ずる学者は、理念型に過ぎぬ唯物史観を、絶対的真理・理想像と見なしていると、ウェーバーは論難する。最後に、自然科学について見てみよう。十九世紀の重化学工業の発展は自然科学の成果である。日常生活の道具となった電気・電車・電話も自然科学の成果である。すなわち、自然科学は、正しさが体得できる科学として、人間の身近に存在したのである。自然科学的な事象把握法を自然主義と呼ぶ。自然主義は、十九世紀の諸科学に、大きな影響を与えている。自然主義は、事象の認識から主観的要素を捨て、客観法則を定立して、因果的に事象を認識しようとする事象把握法である。自然主義は、自然科学の社会への活用を背景に、社会学・経済学・心理学等の諸科学に大きな影響を及ぼしている。例えば、社会学者デュルケームは、個人の集まりを超えた社会という実体が、自然科学の手

法で実証的に把握できると考え、『社会学講義－習俗と法の物理学』を著わしている。だが、ウェーバーは、社会科学は認識主体が認識対象に与える意味に依存するものであり、認識主体から離れた客観対象を認識しようとする自然科学とは異質のものだと主張するのである。

ウェーバーの科学は、いかなる生から生まれたのか。ウェーバーの父親マックス・ウェーバー（息子と同名）は、法律を学んで、ベルリン・エルフルトの両市役所に勤務し、後に国民自由党の代議士となった世俗的な人物である。父方の家系も、織物業・商社等を営み、世俗的で行動的な人が多い。一方、母親の家系には、学校教師・牧師等が多く、宗教的信条を尊ぶ精神が満ちていた。すなわち、父親は、世俗的・常識的・伝統的な生き方をしたのに対し、母親は、内面的・精神的・倫理的に生きようとしたのだった。このような価値観の違いから、外面的に満ち足りた生活にもかかわらず、二人は最後まで理解し合うことはなかったという。ウェーバーの家系は、また、精神神経症の家系であった。母方の叔母とその子供、それに父方の従兄弟の三人が、精神を病んでいた。ウェーバーも、神経症の遺伝子を持っていて、父親との諍いが引き金となって、発病することになる。1894年フライブルク大学の教授となったウェーバーは、1997年突如神経疾患に陥る。母親がウェーバーの家を訪問する件で、ウェーバーが母親の側について父親を難詰した結果、父親が家出をして病死するのである。すなわち、フロイトの主張するエディプス・コンプレックス（親殺しの願望）による父親殺しが行われたのである。このことに衝撃を受けたウェーバーは、極度の精神的な緊張と疲労を訴え、大学に辞表を提出することになる。以後、約六年間、治療のためのイタリア・イギリス等への旅行以外は無為の日々をウェーバーは過ごすのである。それでは、人生はウェーバーに何を与えたのか。少年時に体験したドイツ統一が、非常な感動を呼び起こし、ウェーバーの生き方を決めることになったことは、前に述べたことである。また、ウェーバーは、神経症が快方に向かう1904年、国際学術会議に招待されて、アメリカに行くこと

になる。アメリカでウェーバーは、高層ビル・交通渋滞・大屠殺場等の近代社会を体感すると共に、銀行を開設するために教団に入るという資本主義精神と宗教の関連を目にするのだった。資本主義が生み出す矛盾に起因するとされる社会主義革命すなわちロシア革命も、ドイツ国家・ドイツ文化のために生きようとするウェーバーの心を激しく揺さ振る。ロシア革命に対しウェーバーは、ツァーの専制政治から市民的自由を求める運動であると共感を示しながらも、プロレタリア独裁は大衆本能に基づく兵士帝国主義であり、まわりの民族の自治と安全を脅かしているとして拒否するのである。ウェーバーの晩年には、ドイツを巻き込んだ第一次世界大戦が起こる。共同体のために自己放棄する時が来たとして、ウェーバーは世界大戦に積極的に参加する。五十歳の年齢で行軍できぬウェーバーは、自ら申し出て陸軍大尉として陸軍病院に勤務する。この頃のウェーバーの戦争に対する感激と興奮は、ウェーバーと親交があったルカーチとブロッホが、戸惑いを感じるほどであったという。世界大戦はドイツの敗北に終わるが、敗北が近づくとウェーバーは、戦後ドイツの民主主義体制・平等選挙法等についての提案を、論文・講演等で積極的に行う。敗戦処理のパリ講和会議には、ウェーバーもドイツ代表団の一員となって出席するが、講和条約のドイツに対する過酷さに、ウェーバーは深い絶望に襲われる。以後、愛国心に燃えた実践的行動は、ウェーバーから消失してしまったという。以上のことから判るように、ドイツの国家・文化的隆盛を目的として、社会学・経済学・政治学等の諸学を研究し、その研究成果を実践的に世に問い、その実践から生じた問題を再び学問的に究明する、という行動的な生がウェーバーの生といえるのではないか。このウェーバーの生は、まさに社会科学者のエートスと呼ぶに相応しい生ではないだろうか。

4. フロイトの科学

フロイト (Sigmund Freud 1856—1939) の精神分析は、様々な革新性を持っ

ているが、整理すると次の三つになろう；「無意識という心の領域の発見」、
「自我・エス・超自我という心の構造の提唱」、「幼児期の性的体験が神経症の
原因となることの主張」。ここで、これらの革新性を考察することから、フロ
イト科学の性格を探ることにしよう。

神経症等の神経疾患の原因は、当時の精神医学が考えた様に、脳部位の損傷
や遺伝的素質等の身体にあるのではなく、精神そのものにある。これがフロイ
ト学説の出発点となっている。産業革命によって自然科学の権威が増大し、疾
患の原因が身体という物質にあるとする自然科学の方法論が、十九世紀精神医
学の趨勢となっていたが、これにフロイトは異議を唱えたのであった。神経疾
患の原因が身体になく精神にあるのならば、精神のどこにあるのだろうか。精
神は、意識という明晰なものとして、自己の前に存在しているはずである。フ
ロイトは、無意識という人間に不透明な部分が精神にあって、それが人間の意
識・行動を規定すると考える。十八・十九世紀の理性・科学の時代において、
全面的に信頼を寄せてきた精神・意識に、人間が把握し得ぬ部分があるとい
うのである。人間の心の深奥に位置する無意識によって、信条・感情・認知等
の人間の行動の大半が決められるというのである。この事情をフロイトは「自
我は自分自身の家の主人などでは決してありえないし、自分の信条生活の中
で無意識に起こっていることについても、ごく乏しい情報しか与えられてい
ない」と述べ、自らの理論の革新性をコペルニクスの天動説・ダーウィンの
進化論にも比肩しうるものだと主張している¹³⁾。それでは、フロイトの主張
する無意識とは、具体的にいかなるものであろうか。就眠前に一つの行為を
実行しないと眠れないという就眠儀礼を患っている若い娘を例に、無意識
とは何かをフロイトは説明する¹⁴⁾。この娘は、静けさを保つためと称して、
部屋の大時計を止め、他の時計をすべて部屋から出して、更にベッドの頭
部のクッションをベッドの柵板から離さないと眠れないという。この就
眠儀礼を、実際に行ったか不安だとして一・二時間もかけて、娘は繰り返
す。実行する理由も、不安である等の

漠然とした理由を挙げるに過ぎない。例えば、時計を止めたり部屋から出す理由は、眠るための静かさを得るためとするが、健康人にとって時計の周期的な音は、就眠を誘うものではあっても、決して妨げるものではないのである。この様に、娘は合理的理由もなく不安に駆られて、就眠儀礼を毎日繰り返すのである。このような神経症を患った娘との対話を通して、神経症の原因である無意識が明らかになる、とフロイトはいう。神経症の症状の詳細と症状に対する患者の言い分から、意識化されていない神経症の原因を推察し、それを患者に提示することによって、最初は患者の強硬な抵抗・拒絶に合うかも知れないが、患者の言い訳とそれに対する解釈を何度も提示し合うことを通して、神経症の原因となる無意識が明らかになるという。それでは神経症の原因となる無意識とは、どのようなものであろうか。周期的な時を刻む時計は、周期的な生理をもつ女子性器の象徴であるから、時計を止めて持ち出すことは性交の拒絶を意味している。また、ベッドの柵板は男性をクッションは女性を象徴するものであるから、これらを引き離すことは、男性と女性を引き離すことを意味している。娘の就眠儀礼をこのように解釈し、これ以外の娘の振舞に対する解釈を加えて、両親の間に子供ができることへの恐れが原因であると、フロイトは診断する。すなわち、両親に子供ができて両親の愛が自分から奪われることを恐れるという無意識が、神経症の原因であるとフロイトは主張するのである。この様にフロイトは、意識化が憚れる心の深奥の無意識的願望、性的な生物学的本能に基づく無意識的願望によって神経症が生じると主張するのである。

無意識という領域を持つ心は、いかなる構造を持つのだろうか。心は、自我・超自我・エスの三つの要素からなる、とフロイトはいう¹⁵⁾。エスは、人間の生物学的本能に関連する部分である。人間が個あるいは種として生存を確保するには、食物の奪取・異性の獲得・敵対者の支配等が不可欠である。これらの人間の生存のための必須要件を獲得可能にするものがエスである。エスは欲求を持っていて、欲求が自我を動かして、生存要件を確保せしめるのである。エス

は莫大なエネルギーを持つとフロイトはいう。エスは莫大なエネルギーで自我を動かし、欲求を満たそうとするのである。このエスのエネルギーの強大さは、エスが人間生存の基盤と関係することに原因を持っている。エスのエネルギーが強大であるからこそ、人間は、個としての生を確保し、種としての生を大きくできるのである。またエスは、本能には様々なものがあるから、様々な種類のものからなるとする。また、これらのエスは相互に繋がりを持たず、それぞれが独立に欲求を追求するという。二つのエスの欲求の間に矛盾があっても、欲求は強大なエネルギーで同時に追求されるという。それらは、まさに欲求のカオスであり、様々な欲求で沸騰する釜といえるものである。すなわち、エスは、様々な欲望を持つ多数の人間が、好き勝手に欲望を追求して奔走する無秩序な社会といえるものなのである。それでは、超自我は、いかなる機能を持つのか。超自我は、心の内なる法廷である、とフロイトはいう。心が抱く数多の願望に対して、あるものは認め、あるものは拒否し、あるものは変形する法廷だということである。超自我は、エスと同じように莫大なエネルギーを持ち、心の願望を強い力で厳しく裁断するのである。超自我が存在すること、およびその裁断の残酷さは、精神病者の症状が示すとする。自我の統率能力が減退し被察妄想に悩む精神病者は、彼らの挙動のすべてが知られざる権力に監視されていると告白する。監視の結果を知らせる権力者の幻覚の声が、刑罰をもって嚇すかのように聞こえてくるというのである。これは、心の中に監視機構すなわち超自我が存在することを暗示している。超自我の法廷は、いかなる役割を持つのか。超自我は、両親や社会が内面化したものだという。幼少期の子供は両親に依存して、すなわち両親の監視の下に生きている。両親の賞罰に従って生きている。この両親の監視を内面化したものが超自我だということ。両親は、一つの価値観に従って、子供を監視する。両親の価値観は、社会が形成した社会的なものである。すなわち超自我は、社会の価値観が内面化したものである。この超自我を通して、社会の宗教観・倫理観・価値観が、子供の心に伝達され

るとフロイトはいう。人間の心は、超自我を通して、社会の裁断を受けるのである。また、一つの社会の伝統・神話・宗教が、超自我を通して、子孫に伝達されるとフロイトはいう。エスが生物的本能で、超自我が社会の内面化だとするならば、自我は、これらといかなる関係にあるのだろうか。自我は、意識状態にある心の部分で、外界・超自我・エスの三つの暴君に仕えるものだという。すなわち自我は、人間を取り巻く外界、社会の体現である超自我、および生存のための本能であるエスの調和をとる、という機能を持つのである。前に述べたように、超自我・エスは、強大なエネルギーで、自己を実現しようとする。これらの強力な命令・欲求を押さえ、人間の生存に向けて統一し、人間を取り巻く外界に順応するのが、自我の役割なのである。これから判るように、自我が自我としての機能を果たすには、超自我・エスに劣らぬエネルギーが必要となる。自我が弱体化して、超自我・エスを制御し得なくなった状態が、神経症だとフロイトはいう。従って、治療としての精神分析の役割は、自我を強化し、超自我・エスをコントロールすることにあるのである。

最後に、神経症に対するフロイトの病因観、すなわちフロイトの因果観を考察してみよう。上で述べたように、自我の周りには、生物的欲望を持つエス、社会規範を強要する超自我、順応すべき外界の強制があって、自我はこれらを調整し、人間の一つの態度・行為とせねばならないのだった。自我が弱体化し、この調整に失敗すると、それぞれの欲求が勝手な振舞をし、個としての人間の欲求が満たされないことになる。フロイトは、この自我の状態を抑圧と名づけている¹⁶⁾。自我は、それぞれの欲求を調整して満たすことができず、無意識領域に押し込めねばならないのである。この無意識領域に閉じ込められた欲求が自我に作用し、健康人とは違った意識すなわち神経症の原因となる、とフロイトはいう。神経疾患の原因は、弱体化した自我による諸欲求の抑圧にあるのである。抑圧の中でも特に性本能の抑圧が、神経疾患の原因になるとフロイトはいう。これは、種の保存に関係する性本能が、特別のエネルギーをもつからだ

として、この性エネルギーをフロイトはリビドと呼んでいる。リビドという強大なエネルギーの抑圧が、神経疾患の原因になるというのである。性本能に対する自我の抑圧でも、現時点の抑圧ではなく、小児期における抑圧が、神経疾患の原因になるという。小児期の弱い自我が、外界の性的出来事に遭遇し、適切な処置に失敗して、無意識領域に抑圧すると、大人になって後、その抑圧を原因とする神経症が現れるというのである。小児期の心は、次の構造を持つという。小児期は、成人期の様な自我・超自我・エスに明確に分化した心の構造を持っていない。超自我はまだ形成されておらず、両親が超自我の役割を果たし、自我も未発達で、心はほとんどエスの状態である。従って、突発的な性的事象に遭遇すると、小児は、適切に処置できず抑圧することになる。すなわち、これは神経症に罹患するということであり、人間は小児期（五歳まで）に必ず神経症を経験する、ということである。この小児期の神経症は、子供が成長して自我の力が強固になり、両親の強制が超自我となって内面化・無意識化すると、自然に解消するという。だが、小児期に神経症の原因となった性的体験は、外傷（トラウマ）となって、成人期に神経症となって再び現れるのだという。それでは、精神分析は、どのようにして神経症の原因を探求するのだろうか。患者と分析者との対話を通して、神経症の原因が明らかになる、とフロイトはいう。「心に浮かんだことを何でも話してごらん」という分析者の言葉から治療は始まる。以後、患者の言葉と、それに対する分析者の解釈、解釈に対する患者の反論、反論に対する分析者の精神分析的再解釈、……という対話が、何カ月、何年も続くのである。この対話を通して、神経症の原因となっている抑圧された小児期の性的体験が明らかになると、神経症は快癒するとフロイトは主張する。すなわち、患者と分析者との対話によって、神経症の原因、還元すれば神経症の因果が明らかになるというのである。また、得られた神経症の因果の真偽は、神経症が快癒することによって証明される。精神分析の因果の証明は、治療の成功によってなされるのである。それでは、神経症の快癒とは、

心のいかなる状態をいうのか。小児期の弱い自我によって抑圧せざるを得なかった性的体験を、大人の強い自我の下で合理的に再処置することによって、神経症が快癒するとフロイトはいう。この精神分析的な治療観は、原始社会・古代社会・中世社会において、呪術・神話・宗教等によって、抑圧されていた性的体験を、理性によって合理的に解放しようという近代科学の考え方ではないか。フロイトは、ルソー・コント・マルクス等の社会思想に起源を持つ社会に対する合理的な分析法を、心の分析に持ち込んだのである。

5. フロイト科学の背景

フロイトの精神分析は、いかなる社会的背景で発展したのか。ここで、精神分析が発展した社会的背景を、医学・心理学・自然科学等の科学的背景、フロイトという個人的背景、精神分析の展開にみる精神分析の構造的背景に分けて考察することにしよう。

精神分析の発展は、諸科学とのいかなる関連の下に生じたのか¹⁷⁾。まず、物質科学から見ていこう。物理学・化学等の物質科学が、急速に発達した重化学工業の基盤科学として、信頼を勝ち得ていたことは、ウェーバー科学の背景でも述べたことである。物質科学の世界は、決定論の世界である。運動方程式と初期条件が与えられると、物体の動きを一義的に決定することができる。また、気体の状態方程式と温度・体積が与えられると、圧力を決定することができる。この様に物理・化学の世界は、決定論の世界である。原因となる作用とそれに対する結果が、すなわち因果関係が、一義的に決まる世界である。一方、フロイトの精神分析も、決定論の世界である。夢やしくじり行為には必ず一つの無意識的な意味が含まれるとするし、神経症では原因となる抑圧された小児期の性的体験が一義的に求まるとする。このフロイトの決定論は、物質科学の決定論から、生まれたのではないだろうか。医学においても疾病には必ず原因があるとする決定論があるが、医学の決定論も物質科学の決定論の力を借りて成り

立っているのではないか。また、十九世紀の産業振興を担った物質科学は、エネルギー科学ともいわれる。産業にエネルギー・力を提供する蒸気機関・電動機の科学なのである。蒸気機関・電動機は、人間の制御によって動く。人間が操作を加えることによって、エネルギー・力の供給・停止・調整ができる。蒸気機関車のレバーを軽く動かすことによって、巨大な機関車の前進・停止・後退ができるのである。このエネルギー科学の思考モデルを、フロイトは自我の構造に使用しているのではないか。生物的本能の体现であるエスは、巨大なエネルギーを持った蒸気機関車に似てはいないか。神経症は、制御不可能になった蒸気機関車に似てはいないだろうか。心理学・医学は、フロイトの時代に、いかなる状態にあったのだろうか。これらの科学も、精神分析とは違った形態で、物質科学の影響の下にあったといえるであろう。人間の行動・意識は、脳という物質が生み出すもので、脳こそが心の住処であると心理学は考える。心理学にとって、心の働きが悪いのは脳の機能が悪いからであり、心が病むのは脳が病んでいるからで、脳のどこかに物質的損傷があるからだとするのである。これは医学についても同じで、神経疾患の原因を脳内の物質に探し、その物質に物理的操作を加えることにより、治療を行おうとしていた。例えば、電気には組織の強化作用・細胞の栄養摂取のための刺激作用があると考え、神経疾患を治療するためと称して局部に電氣的刺激を加える電気治療が行われていた。この様に心理学・医学は、物質科学の影響を受けて、疾患の原因は物質にあるとする基質原因論をとっていた。この様な心理学・医学に対してフロイトは、神経疾患の原因は心・精神にあるとして、自我・超自我・エスという心の制御構造を提唱したのだった。当時の心理学・医学が、物理学・化学という物質科学そのものを認識モデルにしたのに対し、フロイトは蒸気機関・電動機という物質科学から派生した技術学をモデルにしたのではないだろうか。医学は、また、異なる物質科学の影響の下にあった。当時の医学の特徴は、治療ニヒリズムと呼べるものであった¹⁸⁾。人間の身体には自然に治癒する能力が備わってお

り、積極的な医療行為は治癒の妨げになるから行わないほうがよい、とする待機療法が当時の医学の治療指針であった。医学の目的は、患者を治療することではなく、正確に病気の診断を下すことだというのである。これも物質科学すなわち自然科学の影響ではないだろうか。偉大な自然は人間の操作をはるかに超えている、人間にできることは単にそれを記述することだけだ、とする自然科学の影響を受けているのではないか。フロイトは、この傾向を持つ十九世紀医学を、自然を操作する学である技術学をモデルとすることにより、乗り越えたのではないか。

フロイトの生は、彼が生み出した科学と、いかなる関連を持ったのだろうか。フロイトの生を、科学者フロイト・神経症患者フロイト・ユダヤ人フロイトに分けて、この考察を行うことにしよう¹⁹⁾。1873年、ウィーン大学医学部に入学したフロイトは、ブリュッケ教授の生理学研究室に入る。ブリュッケ教授の下でフロイトは、神経細胞や繊維の相互の関係を顕微鏡で調べるという神経系の組織学的研究に従事し、観察・発見・理論という当時の医学の科学方法論を自分のものにする。この科学方法論は、患者との対話を通して観察する症状の中から病因を探するという精神分析の方法論、人間は本質的に生物的なもので不断の生物的衝動（エス）に突き動かされているという心の構造論に生かされている。この科学方法論は、客観的事実・物質的基盤の中に原因を探するという自然科学の方法論ではないだろうか。フロイトの精神分析の基盤に、自然科学の方法論があるのである。大学を卒業して病院の勤務医になったフロイトは、奨学金を得てパリの慈善病院サルペトリエール病院のシャルコーの下に留学する。シャルコーは、当時の神経症学の最高権威者であり、催眠療法という新しい治療法を試みていた。神経症患者を催眠術で催眠状態にし、暗示により人工的に神経症をつくると、患者にカタルシスが生じ神経症が治癒するというのである。催眠術により人間が別の人格となって振る舞い、催眠がとけても自分の振舞を覚えていないという事実は、フロイトに心の無意識状態の存在を確信せしめた

に違いないのである。フロイトは、また、自らも神経症患者であった。1886年の結婚前後からフロイトは、偏頭痛・動悸・不整脈・抑鬱気分・不安発作等のノイローゼ症状を訴えるようになる。神経症を患ったフロイトの相談相手になったのは、二歳年下の耳鼻科医フリースであった。フロイトは、彼から治療を受ける患者のように、精神的な苦痛・不安・苦悩をフリースに訴え、フリースは、フロイトが治療を行うときのように、フロイトから症状を聞き治療を試みるのである。自らの神経症を治療する体験を通して、フロイトは、治療者への依存感情の転移や、治療者の分析に対する抵抗を、すなわち彼の患者が治療者フロイトに見せるものを、被治療者として体感するのであった。これは精神分析の治療の内実をフロイトに理解させ、精神分析的方法の確立に役立ったのだった。1896年の父の死も、また、フロイトを不安ノイローゼに陥れ、父母との関係が原因となる神経症を、我が身で体験することになる。不安ノイローゼの自己分析は、フロイトに幼児体験を回想せしめ、自己の心の中に、母に対する性愛、父に対する敵意、およびその敵意に対する罪悪感を自覚せしめるのである。すなわち、精神分析の理論的核であるエディプス・コンプレックスを、自己の心の中に発見するのである。フロイトは、また、ユダヤ人であった。ユダヤ人は、ヨーロッパ社会そのものであるキリスト教徒からの異教徒としての抑圧、ユダヤ教の厳しい戒律によるユダヤ社会内部からの抑圧という、二重の社会的抑圧の下に生きていた。ユダヤ人は、強い力で行動を制限する社会的圧力と、厳格な規範で自らの行動を縛る内部的な力の下で、自分の生における願望・夢・欲求の実現を目指さざるを得なかったのである。これは、外界・超自我・自我・エスという四つの要素からなるフロイトの心のモデルと同じ構造を持っていないか。ユダヤ人である自我は、社会という外界に囲まれて、ユダヤ教という超自我の下で、願望や夢という生物学的エスの実現を目指して生きているのである。この様に、フロイトの精神分析は、フロイトが置かれた社会的状況をモデルとする人間の精神事象の解釈である、ということができるのである。このフロイ

ト科学の特徴は、精神分析が社会事象の分析にも役立つことの原因となっているのではないか。

最後に、精神分析の学問的展開を見ることにより、精神分析の発展の背景となっている学問的性格を考察してみよう²⁰⁾。フロイトの精神分析から派生したと思われる諸学に次のようなものがある；アドラーの個人心理学、ユングの分析心理学、 فرانクルの実存分析、A・フロイトの自我心理学、ビンスヴァンガーの現存在分析、クラインの対象関係論、ライヒの性格分析、ラカンの構造主義、クリステヴァのポスト構造主義。フロイトの精神分析が刺激となって、この様な多方面に及ぶ諸科学・諸思想が誕生したのである。これらの諸学の中から、アドラー、ユング、フランクルを選び、精神分析との関連を調べることによって、精神分析の科学としての性格を考えてみよう。アドラーは、フロイトの一番弟子といえる精神科医だった。フロイトが、人間を駆り立てる性本能が神経症の原因であるとしたのに対し、アドラーは、劣等感を克服しようとする人間の意志が神経症の原因となると主張する。人間は、肉体的劣等・知的劣等・社会的劣等など、様々な劣等感を持っている。この劣等感を克服するため、人間は激しい闘争心を燃え立たせる。この劣等感の克服過程から、人間の性格が決定されるという。だが、この克服に失敗すると、人間は神経症に逃避するという。すなわち、神経症は正当な手段で劣等感を克服できない人間が示す症状で、自分の行為が失敗に終わる事態を避けるための弁解であるという。従って、神経症の治療は、真の現実的な自己の実現を図ることだとするのである。ユングも、また、フロイトの弟子であった。フロイトの無意識は超自我と性本能からなっていて、これらは盲目的で衝動的な欲求に過ぎなかったが、ユングは、無意識には集合的無意識と呼べるものがある、この無意識によって文化的・人類的創造が生じると主張する。心の最深奥にはすべての人類に共通な集合的無意識がある、これによって民族を超えた神話・宗教・芸術が生まれるというのである。また、ユングにとって神経症の原因は、無意識と自我の

人間の調整作用が未発達であって、人間を取り巻く状況への自我の対応が原始的手法で行われることにあるとする。従って、神経症の治療は、現在の自我の状態を突き崩し、根源的で普遍的な無意識を取り込む新しい自我を再構築することとなる。フランクフルは、ナチスの強制収容所での体験を描いた『夜と霧』で名高い精神科医である。フランクフルは、フロイトが人間存在を性本能等の衝動に駆り立てられる存在とみなすのに対し、一つの目的の実現のために全存在を賭ける存在とみなす。すなわち、実存主義のテーゼ「人間は、単に存在するだけでなく、何かを志向して存在する」が表す人間観を信奉する。フロイトのように人間存在は過去の性的外傷によって一義的に決定される存在なのではなく、心の内に保持する生きる意味・生きる目的の実現を目指して、人間の全存在を傾注する存在だというのである。すなわち、フランクフルにとって精神療法とは、神経症者に生きる意味を教える手法、神経症者に社会から期待される存在であることを教える手法となるのである。この様に、フロイトの精神分析から派生した諸学は、フロイトが提示した無意識・抑圧等の大きな枠組みは堅持しつつも、ある部分に批判を加え、フロイトを超える理論として主張されている。これは何を意味するのだろうか。これは、フロイトの精神分析が、ウェーバーの主張する理念型であることを意味するのではないだろうか。フロイトの精神分析が、フロイトが置かれた社会やフロイトが体験した生に起源を持つ精神事象に対する一つの見方に過ぎないことを意味しているのではないか。上述の精神分析から派生した諸学も、提唱者の閱した人生経験から精神分析に批判を加えた、提唱者の観点から精神事象を把握するための理念型ではないだろうか。

6. ウェーバーの科学とフロイトの科学

ここでは、ウェーバーとフロイトの二つの科学を対比させて、二つの科学の類似性・相違性といったものを考えてみよう。

十九世紀末社会は、政治・社会・人間に対する様々な言説が飛び交い、無責

任・無秩序・無批判の言説の増殖と化していた。貴族は国民が国家に奉仕することの重要さを唱え、牧師は聖書に基づいた行為の貴重さを説き、資本家は社会のすべてが産業のためにあることを主張していた。人々は、心に浮かんだ主観的・相対的なものを、絶対的真理であるかのように強弁していた。このような言語に対する社会の危機的状態に対し、哲学者ヴィトゲンシュタインは、語り得るものと語り得ぬものを明確に分け、語り得るものを自然科学の対象である自然だけに限り、真理は自然科学の言説のみが持つものとしたのだ²¹⁾。ヴィトゲンシュタインと同じ試みを、ウェーバーとフロイトも行ったのではないか。ウェーバーは、「没価値性」の主張の中で、認識と価値を明確に分けることを要求する。言説の中に認識と価値が混交しているが故に、言説は事実を反映しないものとなり、言説が導く政策は失敗に終わり、言説の真偽を究める討論は空転するというのである。人間の行動に価値は不可欠である。あらゆる行動は、一つの価値を背景にして、実行に移される。価値が明確になって後、行動は実行される。従って人間はとにかく価値を求めようとする。人間の行動を確実なものにする認識と同時に、価値を得ようとする。すなわち、認識と価値の混交は人間の本性に基づくのである。ウェーバーは、この人間の根源的な欲求である認識と価値の混交を、禁欲によって分離することを要求するのである。認識から価値を分離することによって、認識を内容とする言説は客観的なものとなり、真偽の判断が可能なものになるというのである。これは、ヴィトゲンシュタインの言説を明晰にする試みと同じでないだろうか。神経症の患者の言説もまた、一般人には理解し得ぬものである。この神経症者の言説を明晰にする試みが、フロイトの精神分析である、といえないだろうか。神経症者の言説は、なぜ理解し得ないのだろうか。それは、人間の心に無意識の領域があって、無意識が自我に悪作用をするからだ、フロイトは答えるのである。健康人にも無意識はあるが、それは自我の適切な制御の下にある。だが、神経症者の無意識は、過去の抑圧により大きなエネルギーを持ち、自我に強力に作用するというのであ

る。この無意識を理解すれば、神経症者の異常な言動が理解できると共に、神経症者の自我による無意識の制御が回復され、神経症が治癒するというのである。この様にウェーバーとフロイトは、それぞれ社会と心の不明瞭な言明を明晰にすべく、心血を注いだのである。得た結論は、共に、自我を強化すれば、自我の分明作用により、言明は明晰化する、ということだった。ヴィトゲンシュタインと同じように、ウェーバーとフロイトは、世紀末社会の曖昧な言説と戦い、自我すなわち理性の力によって明晰化し得ることを示そうとしたのである。

科学の本質は因果律にあるとされる。因果律は、原因と結果の枠組で行う事象把握法で、事象の普遍的必然的説明原理であるとされる。因果律は、ウェーバーとフロイトの間で、いかに異なるであろうか。フロイトは、科学の因果律を信じて、研究を進めていた様に思える。神経症という事象には必ず一つの原因があり、その原因により神経症は発病する、と考えていた様に思える。因果律を信じて研究を進めたフロイトは、強迫神経症・不安神経症などの神経症の原因として、心に無意識領域があることを発見する。更に、無意識領域の何が原因となって神経症が発病するかを問題意識として研究を進めた結果、小児期の性体験が原因となって発病することを発見する。これから分かるようにフロイトは、因果律を研究の黄金律のようにして、精神分析の研究を進めていくのである。ところで、因果関係には、繰り返しが期待される法則的なもの、二つの事象間の単なる関係に過ぎないもの、事象が成り立つ理由とその事象間の関係等、様々なものがあるが、フロイトの因果律の因果関係はいかなる性格を持っていたのであろうか。フロイトの因果関係は、一つの事象には必ずそれを生み出す一つの原因が存在して、その原因が存在すれば何度でも事象が繰り返して生起するという、自然科学の因果関係であるといえるのではないか。フロイトは、自然科学の因果律を武器に精神疾患の治療を試み、精神分析という新しい治療法を発見したのである。しかしながら更に正確には、フロイトは、自然科学的医学の因果律を信奉し、神経症を解明したのではないか。一つの事象

は多くの要素が絡まって生起するが、複数の要素の内の二つを原因と結果として事象を把握するのが、因果律的事象把握である。これは自然科学よりも医学に近い事象把握ではないか。疾病には、必ず、細菌の感染、臓器の機能の低下等の原因が存在して、この原因を何らかの方法で取り除けば患者は治癒する。これが医学の因果律である。フロイトは、医学の因果律を信じていたのではないか。それでは、ウェーバーの因果律はいかなる性格を持っていたのか。ウェーバーも、科学の目的は事象の客観的な因果関係を求めることにあるとする。だが、ウェーバーの因果関係は、フロイトのものとは異なっている。ウェーバーの因果関係は、理念型により作られた因果関係であり、事象の性格を際立たせて、事象の認識を容易にする因果関係なのである。ウェーバーは、一つの観点の下でのみ事象の認識が行われ、その認識の内容を明確に表すものが因果関係であるとするのである。従って、ウェーバーの因果関係の原因と結果の関係は、フロイトのような絶対的・一義的なものではなく、認識の観点の相違によって一つの結果に様々な原因が対応するものなのである。だが、原因と結果の関係は、実証的に関係を考察することにより客観的なものになる、とウェーバーは主張している。

社会学者ウェーバーが提唱する社会のモデルと、精神医学者フロイトが提唱する心のモデルは、いかなる関係を相互に持つのだろうか。社会に対するウェーバーのモデルは、著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』から知ることができる。この著書でウェーバーは、「自己の職業を使命とする意識」である資本主義精神が、職業実践によって神の救いの確証を得るというプロテスタンティズムの倫理観に、起源を持つことを示したのだった。すなわち、社会事象である資本主義が、人間の精神に起源を持つことを示したのである。資本主義という社会事象が、中世封建社会・都市商業社会等の社会的なものではなく、個々の人間の倫理観に起源を持つことを示したのである。ウェーバーは、社会事象の起源を、社会事象の中ではなく、個人の精神事象の中に求めたので

ある。それでは、フロイトのモデルはいかなる性質を持つのか。フロイトは、人間の心は自我・超自我・エスという構造を持つとする。超自我は社会の欲求、エスは生物としての欲求、自我は人間としての欲求を表し、これらが競い合っているというのである。これは社会の縮図ではないだろうか。社会は、理性的な人間・体制的な人間・生物本能的な人間等、様々な人間から構成されており、これらの人間は、社会の中で自己の欲求を追求している。これらの人間の競い合いの結果、社会は、平衡状態としての秩序を持つことになる。この様な社会と、フロイトの心の構造は似てはいないか。フロイトは、精神事象を説明するのに、社会のモデルを使用したのである。すなわち、ウェーバーは社会事象を説明するのに精神事象を利用し、フロイトは精神事象を説明するのに社会事象を利用したのである。ある領域の事象の説明に他領域の事象を利用することは何を意味するのだろうか。事象の科学的説明は、通常、同じ領域内で行われるべきである。他領域の事象の安易な利用は、類推（アナロジー）による説明となり、実証的确实性を持たぬものとなろう。他領域の事象による説明が有効なのは、他領域の事象が科学的に明確に解明されている場合のみである。熱現象という巨視的事象の説明にニュートン力学という微視的事象を利用する統計熱力学が、これに相当するであろう。ニュートン力学は、実験的にも、理論的にも、余すところなく展開されているからである。ウェーバーとフロイトの他領域の利用は、いずれに属するのであるだろうか。社会事象と精神（心理）事象は、互いに関連を持たぬ他領域とはできぬ密接な関係があるのではないか。心理学者ピアジェが主張するように、心理事象は社会が内面化したものであり、社会事象は個人の心理が外面化したものではないのか。すなわち、社会と心理は本来一つのものなのである。この事実が、ウェーバーとフロイトの主張を、确实性に持つものになっているのではないか。

最後にウェーバーの科学とフロイトの科学が、何を相互に教え合うのかを考察してみよう。ウェーバーの科学は、フロイトの科学に、精神分析が理念型で

あることを教えるのではないか。精神分析に数多くの分派があったことは、前にふれた通りである。分派は、フロイトの精神分析の大きな枠組みを保持しつつも、部分を修正して新しい考えとして提示したのだった。このことは、フロイトの精神分析が、力点を置く個所を変えることによって、様々なものになりうることを示しているのではないか。これは、フロイトの精神分析が、フロイトの固有な観点からの理念型であることを意味するのではないか。それでは、理念型に過ぎない精神分析が、十九世紀末文化を代表する学説に、どうして成り得たのだろうか。それは、精神分析の事象を把握する観点が、今までにない新しいものであったこと、しかも現実の精神事象の一面を表現するものであったことによるのではないか。それでは、フロイトの科学はウェーバーの科学に何を教えたのか。ウェーバー社会科学の独創性の一つは、資本主義という社会事象と宗教倫理という精神（心理）事象を結び付けたこと、すなわち資本主義の発展がプロテスタンティズムの倫理に原因を持つことを示したことだった。ウェーバーは、なぜ資本主義という世俗的なものと、宗教倫理という精神的なものを結び付けようとしたのだろうか。フロイトは、次のように言うのではないか。資本主義は世俗的で行動的であった父親を表し、宗教倫理は精神的で内面的であった母親を表している。資本主義の発展が宗教倫理に原因を持つことは、父親の物質的成功が母親の精神的労苦に支えられていることを表している。しかしながら、実際の父親と母親は、互いに理解し合うことがなかった。それだけでなく、二人が争っている時、ウェーバーが母親を味方した結果、父親は死んでしまう。ウェーバーは、父親を殺してしまったのである。この自責の念から、ウェーバーは神経症を患うことになる。この現実を、上述のウェーバー理論の解釈と比較すると、ウェーバーは父親と母親を結び付けようとしていることが理解できよう。理解し合えなかった父親と母親の間に、ウェーバーが入った結果、父親の死を招来し、二人を完全に引き裂いてしまった。この離反した父親と母親を、原因と結果の離れ得ぬ関係として、ウェーバーは結び付けてい

るのである。ウェーバーが引き裂いた父親と母親を、同じウェーバーが、父親の世俗的成功が母親の精神的労苦の上に築かれたことを示すことによって、結び付けているのである。すなわち『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、ウェーバーが引き裂いた父親と母親を、社会学理論によって客観的・理念的に結び付ける試みということができよう。

7. 結 論

以上の考察から次のことが結論できる。(1)ウェーバーの没価値性の理論と、フロイトの無意識の理論は、世紀末ヨーロッパ社会の言説の曖昧性を取り除くための理論と考えることができる。(2)フロイトの因果律は、自然科学の決定論的因果律であるのに対し、ウェーバーの因果律は、認識のための便宜的因果律であるが、科学の因果律の本来の姿は、ウェーバーの因果律が表している。(3)フロイトは精神（心理）事象を説明するのに社会事象を利用し、ウェーバーは社会事象を説明するのに精神（心理）事象を利用している。これは、社会と精神（心理）が同じ内容を持つことによると思われる。(4)ウェーバーは、フロイトに、精神分析が理念型で、絶対的真理を持たないことを教える。一方、フロイトは、ウェーバーに『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は理解し合えなかった父親と母親を理念的に結び付ける試みであることを教える。

参考文献

- 1) マリアンネ・ウェーバー『マックス・ウェーバー』（大久保和郎訳）みすず書房（1963年）。
- 2) M・ウェーバー『社会科学方法論』（富永・立野訳）岩波書店（1936年）、12頁。
- 3) 文献2）、32頁。
- 4) M・ウェーバー『職業としての学問』（尾高邦雄訳）岩波書店（1936年）。
- 5) 文献2）、72－83頁。
- 6) M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（梶山・大塚訳、中央公論社『世界の名著ウェーバー』（1975年）所収）。

- 7) レイモン・アロン『社会学的思考の流れⅡ』（北川・宮島・川崎・帯刀訳）法政大学出版局（1984年）、259頁.
- 8) 文献6)、1章2節.
- 9) 文献6)、2章1節.
- 10) 文献6)、2章2節.
- 11) 文献7)、268頁.
- 12) 社会的背景・人間的背景については、以下の文献を参考にした。
 安藤英治『マックス・ウェーバー』講談社（1979年）.
 尾高邦雄『マックス・ウェーバー』（中央公論社『世界の名著ウェーバー』（1975年）所収）.
 マリアンネ・ウェーバー『マックス・ウェーバー』（大久保和郎訳）みすず書房（1963年）.
 雑誌『知の考古学』（「マックス・ウェーバーとその時代」総特集、1976年8・9号、社会思想社）.
- 13) S・フロイド『精神分析入門』（懸田克躬訳、中央公論社『世界の名著フロイト』（1966年）所収）、第18講.
- 14) 文献13)、第17講.
- 15) S・フロイド『続精神分析入門』（古澤平作訳）日本教文社（1969年）、第31講.
- 16) S・フロイド「非専門家による精神分析の問題」（R・ウェルダー編『フロイト入門』（村上訳）みすず書房（1975年）所収）.
- 17) J・A・C・ブラウン『フロイドの系譜』（宇津木、大場訳）誠信書房（1963年）、1章.
- 18) W・M・ジョンストン『ウィーン精神』（井上、岩切、林部訳）みすず書房（1986年）、338頁.
- 19) フロイトの生と科学の関連については、以下の文献を参考にした。
 E・ジョーンズ『フロイトの生涯』（竹友、藤井訳）紀伊国屋書店（1969年）.
 小此木啓吾『フロイト』講談社（1978年）.
 ピエール・パパン『フロイト』（小林修訳）創元社（1992年）.
- 20) フロイトの精神分析の性格については、以下の文献を参考にした。
 小此木啓吾『フロイト』講談社（1978年）.
 鈴木晶『フロイト以後』講談社（1992年）.
 J・A・C・ブラウン『フロイドの系譜』（宇津木、大場訳）誠信書房（1963年）.
- 21) 坂恒夫「ヴィトゲンシュタインによる科学の総合」（岐阜薬科大学教養科紀要、第5号、1993年）.